民俗調査の視点から見たインドネシア農業・農村の現代的諸問題

Agriculture and Rural Issues in Indonesia as seen from Folklore Research

○山下裕作*　横山繁樹**

（YAMASHITA Yusaku.　YOKOYAMA Shigeki）

１．はじめに：　本報告は，「ジャワ島中部ソロ川上中流域における地域資源適性利用による環境創造型農村の空間構築」（科研費・基盤研究 A）の一部として，インドネシア共和国中部ジャワ州の農村を対象に，2011 年９月と 2013 年１月に実施した現地調査結果の中間的取りまとめである。本調査は国際農林水産業研究センター等による農業経済調査だが，報告者は民俗調査の実施を要請され実施した。今回報告する内容は２週間程度の調査結果に過ぎないが，インドネシアにおける「地域資源」の持つ可能性と、「環境創造型農村」構築のための課題を調査結果から不完全ながらも抽出する。

２．調査地：　現地調査はインドネシア共和国中部ジャワ州ウォノギリ県のジャティプルノ・ギリマルト・マニャラン３郡で実施した。ウォノギリ多目的ダム上流域に位置する農村を対象にしている。本地域は多くの人口を擁する農業地帯であると同時に，ダムの管理問題から，地域資源の適性利用による土壌流出の抑止のため、環境創造型農業への転換が求められている農村地域でもある。

３．調査の方法：　報告者は，生業暦作成の聞き取りを行いながら，話者が得意とする話題を探り，深めていく，という調査手法をとる。コミュニケーションの中で，話者と調査者との間で相互理解という「客観」を作り上げるのである。しかし今回は海外調査であり，コミュニケーションは極めて難しい。そのため現場での手探りによって調査をすすめた。その結果，これまで①農業語彙の調査　②子供のころの遊びの調査　④農村芸能と民俗信仰に関する調査　⑤生業暦調査　⑥口承文芸,の調査を行うことができた。

４．農業語彙に関する調査：　2011 年９月の最初の調査（ジャティプルノ）において，報告者は民俗学の基本である語彙調査を試みた。語彙は特に農業に関するもの、作物や道具や作業の名称等について聞き取った。インドネシアには多くの言語があり，インドネシア語が国語であり公用語とされている。しかし，このジャワ島中部地域における生活言語はジャワ語である。インドネシア語はそもそもマレー語に起源をもつ交易語であり、生活言語とする人々は約 3000 万人程度である。一方，ジャワ語は最も人口周密なジャワ島の言語であり，生活語とする人々も非常に多い（約 8000 万人）。現在ではジャワ語を母語とする人々も，公式の場では主としてインドネシア語を使う。そのため、農業関係の語彙を収集するにおいてもインドネシア語とジャワ語の双方から収集し，比較検討することとなった。その結果，ジャワ語の農業語彙の豊富さに比して，インドネシア語のそれは貧弱で,またごく近年にジャワ語から移入されたものが多いと見受けられた。

---

*熊本大学大学院社会文化科学研究科 Graduate School of Social Cultural Sciences Kumamoto University

**（独）国際農林水産業研究センターJapan International Research Center for Agricultural Sciences

ｷｰﾜｰﾄﾞ：ウォノギリダム，民俗調査，環境創造型農業

５．子供の遊び調査： 2013 年 1 月の調査においては、子供の遊び調査を中心に行った。約 60 年前から 30 年前の遊びを対象とし，65 才から 85 才の高齢者，そして 40 才代の壮年層に聞き取りした。「子供の遊び調査」は民俗調査のスタンダードな項目の一つであるが，子供を巡る地域・環境・仕事を知る重要な調査となる。６名ほどの調査を行ったが，多様な地域環境での様々な遊び採取できた。現在と比較して最も変化著しい遊びは，「川遊び」である。今も子供たちは川や用水で遊んでいるが，７０才代後半の高齢住民達は、同じ川で多くの生物を捕らえて食料としていた。「三角ジョウケ」によく似たザルに手で追い込むだけで多くの小魚や海老やヤゴが採れたという。現代の若者達には，そこまで濃厚な生物群の存在は記憶になく、実際に川を踏査しても生物を見かけなかった。農薬を用いた毒漁のため１０年程前より環境が悪化したというが，水田においてもカエルを見出せない。農業生産活動（特に農薬・除草剤類）が生物相に強い負荷を与えている懸念がある。聞き取りの中で，住民達は，以前に比べ生活は格段に楽になったと言う。しかし，その一方で昔の美しい川やわき水を取り戻したいと明言する。

６．農村芸能と民俗信仰に関する調査： ジャワ島中部はワヤン・クリ（水牛の皮で作られた人形を用いた影絵芝居）が盛んな地域であり，しばしば農村でも行われている。人形を操るワヤンの・クリの指揮者であるダラン，およびガムラン奏者たちは農村部に居住する者も多く，彼等が農村芸能としてのワヤン・クリの担い手である。２０１１年９月，２０１３年１月の調査において，ジャティプルノ，マニャラン，ギリマルトに住み周辺農村のワヤン・クリを担っている３人のダランに会うことが出来た。この三者ではワヤン・クリや人形の意義や意識が全く異なる。それはそれぞれの地域で，ワヤン・クリの今日的意味づけ（信仰、年中行事、娯楽、国際的観光資源など）が，ジャワ古来の自然観・宗教観・伝承、ヒンズーとイスラム教の教義，さらに近代合理主義との相互作用から形成され現在も変化しつつあることによる。

７．まとめ： 農業農村の多面的機能という発想は日本においても比較的新しい考え方であるが，その機能の一つ一つは古くから意識化され言語化され，各地方の言葉の中に農業語彙として蓄積されてきた。「地域資源」「多面的機能」が施策化された背景には農業語彙が公用語の一部として施策立案の場で用いられてきたからとも言える。ジャワ島での環境創造型農村を実現するためには，ジャワ語の持つ豊かな農業語彙の活用が求められる。また今次の調査は純農村地域で行ったが，農村環境は思いのほか悪化している。地域の住民達に対する聞き取りでは，過去の農村環境が美しく豊かな環境としてコミュニケーションの中で共有理解しえた。住民自らが環境の回復を意識し課題化することは十分可能である。これは環境創造型農村構築の主要なエンジンたり得るであろう。また農村芸能とその信仰は，宗教的問題と近代合理主義の影響から，現況において深い問題を抱えていると観察できる。環境創造型農村としての事業（特に国際交流をも含めた都市農村交流事業）を想定した場合，農村芸能は重要な地域資源たりえるが，活用を目途とした資源化には，イスラム国家でありまた発展著しい新興国としてのインドネシア社会に，農村芸能や信仰等の農村伝承を，価値あるモノとして行政的に位置づけることが必要である。日本国の文化財行政，特に無形民俗文化財の経験は有益であると考えられる。その他，生業調査や口承文芸調査の結果についても触れる。